

第五交響曲の「作為」

私がまだ大学院生だったころのことだから、1980年代のはじめだと思うのだが、家の近くに学生時代からの友人が住んでいて、ときどき遊びに行った。彼はそのとき無職で、三畳一間の風呂無し・トイレ共同という、長屋のような所に住んでいた。遊びに行っても、あまり会話をすることなく、ただクラシック音楽を聴くだけということが多かった。音源は、はっきり思い出せないが、当時のことだから、たぶんカセットテープだったと思う。

ある夜も、いつものようにビールを飲みながら二人で音楽を聴いた。その日の曲目は、ショスタコーヴィチの交響曲第5番だった。第4楽章に入ってしばらくたったとき、彼が突然、「ここは作為的だな」と言った。

私はこの言葉の意味を「わざとらしい」、さらに「迎合している」というような意味に受け取った。そして「そうだな」と頷いた。それまでの、けして単純とは言えない曲の流れの中で、その箇所では、あまりにも鮮やかに、あまりにもわかりやすく短調から長調に曲が転じたことに私も気づいたからである。曲が終わった後、どんな話をしたか記憶にない。おそらく、あれ以上の曲への言及はなかったであろう。なぜなら、その時の私たちは、ショスタコーヴィチの人物や音楽についてほとんど知識を持ち合わせていなかったからだ。

その後も、今日に至るまでショスタコーヴィチについての知識は増えなかった。ソビエト社会主義共和国連邦という、20世紀の世界に深刻な影響を与えた政治体制と密接に関わって生きた作曲家、という印象を持つだけだった。しかし、今回このエッセイを書くにあたって、少し調べてみて、30年以上も前の、あの夜の友人との短い会話が、それなりに曲の的を射ていたことがわかった。

第5交響曲が初演された1937年のソ連は、スターリンの恐怖政治のただ中であつた。誰もが密告や不当な罪のなすりつけによって突然逮捕され処刑されてしまう可能性があつた。ショスタコーヴィチの姉の夫も逮捕され獄死した。その年の5月、親しくしていた軍人がスターリン暗殺計画の容疑で逮捕・処刑されたとき、ショスタコーヴィチも逮捕の瀬戸際に立たされた。彼が助かったのは、たまたま取調官が先に逮捕されてしまったからだった。

こうした重圧の中で第5交響曲は作曲された。しかも、芸術家には、他の人々にはない重圧が加わっていた。芸術での表現が権力者にどのようにみなされるかという問題である。作品にもし「反ソ的」「社会主義を害する」といったレッテルが貼られれば、それは単に芸術活動の停止を意味するだけでなく、逮捕とその先の悲劇を招く恐れがあつた。しかし、何が社会主義に反するのかは、音楽のような芸術に

おいては、あいまいで恣意的であった。スターリンがクラシック音楽好きであったことは、やっかいさに拍車をかけた。前年 1936 年 1 月にショスタコーヴィチのオペラ『ムツェンスク郡のマクベス夫人』を観劇しに来たスターリンは、途中で帰ってしまった。その二日後に、ソビエト共産党機関誌プラウダに「ショスタコーヴィチの作品は音楽ではない、混乱だ」とする記事が載り、その後、尻馬に乗った批評家たちによって、いっせいにショスタコーヴィチ音楽への攻撃が始まった。

第 5 交響曲の作曲は、そうした中での作曲でもあった。つまり、この新しい交響曲は、スターリンとその取り巻き連中の機嫌を損ねず、願わくは名誉回復し、一般聴衆にも歓迎され、かつ作曲家の自負心と創造欲を満足させなければならなかった。何というきびしい試練であったろうか。日本でも戦前・戦中に芸術家への弾圧はあり、小林多喜二のような例もあったが、スターリンの圧政は、その比ではなかったであろう。

交響曲というジャンルで、20 世紀に名作を生み出したのがソ連であったのは偶然ではない。人生をかけた作品は交響曲がふさわしい。初演が成功した翌年の「文学新聞」にショスタコーヴィチは次のように書いている。「私の新しい作品は、抒情的英雄的交響曲といってもいいと思う。その基本的思想は、人間の波瀾の生涯とそれを乗り越える強いオプティミズムである」。

ショスタコーヴィチの死後、ソロモン・ヴォルコフによって刊行された『ショスタコーヴィチの証言』は、「ソ連の御用作曲家」という、資本主義諸国でのショスタコーヴィチ像を大きく転換させるとともに、この本の信憑性をめぐる論争を引き起こした。この本の中でショスタコーヴィチは、交響曲第 5 番の主題を「強制された歓喜」と言ったが、この「証言」の真偽も論争になった。だが私は、この表現と上記の「文学新聞」の表現との間に矛盾を感じない。私の若き日に、友人が「作為的だ」と感じた箇所は、スターリンや観客を喜ばせるための作為だったかもしれないが、重圧の中での作曲にせめてものオプティミズムを取り込むための、やむにやまれぬ転調であったのかもしれない。

ところが、このエッセイを書くために久しぶりに第 5 交響曲を聴いてみたところ、第 4 楽章の問題の箇所に来ては引っかからない。すんなり聴けてしまったのである。年を重ねて様々な「作為」に馴れてしまって、その箇所を特別に思わなくなってしまうのか、単に感受性を失ってしまったのか。作曲家が人生を賭して作曲した交響曲は、聴く側も自分の人生を振り返りながら聴かねばならない。

([名古屋大学交響楽団第 108 回定期演奏会パンフレット](#))